2010 年 10 月 20 日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

口腔疾患領域と漢方医学

大阪歯科大学　歯科医学教育開発室　教授　　王　宝禮

（1）口腔領域における漢方治療の考え方

本日は口腔領域に対する漢方薬について、その総論をお話しさせていただきます。日経メディカルの医師対象の漢方の使用状況について、このように約 86.3%の先生方が処方しているというデータが出ました。

また、その内訳、つまり漢方薬を用いている疾患と症候にはこのようなものが挙げられています。例えば、不定愁訴・更年期障害・自律神経失調症、便秘、急性上気道炎、こむら返り、アレルギー性鼻炎、疲労・倦怠感、痰・咳などがあります。これらが漢方薬処方の上位に入っております。この、例えば不定愁訴、更年期障害、自律神経失調症、こむら返り、疲労・倦怠感、さらに食欲不振・栄養状態の改善、あるいは月経不順・月経困難症、術後の不定愁訴、いわゆる従来の西洋薬ではなかなか治りづらい疾患に対して漢方薬を使っているということがわかります。また、さまざまな疾患について漢方薬が投薬されてい

るということがわかります。

さて、今回は口腔領域に対する漢方処方でありまして、西洋医学的に口腔疾患の疾患を考えてみます。先ほどのいわゆる口腔疾患に対しても漢方処方というのはなかなか少ないのではないかという感じがしております。西洋医学的に口腔疾患を考えた場合には、例えば「口内炎ができてしまいました」あるいは「口内炎がなかなか治りません」、そうなりますと西洋医学的には、その疾患名はウイルス性口内炎とかアフタ性口内炎であったり、褥瘡性潰瘍であったり、悪性腫瘍、あるいは扁平苔癬、天疱瘡、難治性口内炎という診断名が付きます。さらに例えば「口の中がヒリヒリして痛いです」「口角炎がなかなか治らない」「舌の色が真っ赤になっている」「舌の色が黒くなっている」「舌の色が白くなっている」、そういったような症状に対して疾患名は慢性のカンジダ症であったり、舌痛症であったり、黒毛舌であったり、白板症であったり、急性偽膜性カンジダ症であったり、そのような症状名が付くわけです。あるいは「物が飲み込みづらい、食べづらい」嚥下障害、ドライマウス、「食べ物の味が昔と違う」味覚障害、あるいは薬の副作用、「歯ぐきが腫れてきている」そうしたことに関しては歯周病。このような口腔疾患に対してさまざまな疾患名が付きます。それに対していわゆる西洋医学治療としては、抗菌薬とかステロイド、あるいはそういったものを中心に、主に処方されているわけでございます。

一方、口腔領域における漢方処方の考え方というのは、心身一如、医食同源などの概念が漢方医学の根底をなしており、全人的な歯科治療が求められている現在、口腔領域の疾患に対する漢方薬の応用は不可欠だと考えられます。心身医学的要因による顎関節症、扁平苔癬、舌痛症など、西洋医学的アプローチで症状が改善しない症例は少なくありません。このような、症状改善が困難な症例に対して、漢方薬がかなりの改善効果を有していることも事実であります。こういったことから、口腔領域に対する口腔疾患に対して広く漢方薬が使われているわけでございます。

では、どういった疾患に対して漢方薬が主に使われているのかと言いますと、具体的には、口内炎、口腔乾燥症、味覚障害、口臭、舌痛症、顎関節症、歯を抜いた後の処置（抜歯処置）、歯周疾患、口腔癌、このような疾患に対して、あるいはこのような症状に対して漢方処方がよくみられます。

さて、実際このように、今挙げた疾患などは口腔疾患に漢方薬が有効であるという報告が山のようにあります。そして、臨床の現場でも多くの漢方薬が処方されています。漢方薬は従来から、先ほどもお話ししましたように、不定愁訴や更年期障害、自律神経失調のような症状改善が困難な例に対して有効であるとされております。ということは、お口の中に関しましては、口がよくわからないけれども渇く、舌が痛い、あるいは口の中が腫れて困る、あるいは味がおかしい、顎の調子がおかしい、あるいは口の臭いがいっぱいする、こういった器質的変化のない場合や、あるいは難治性の場合、いわゆる広義に口腔不定愁訴に対して漢方薬が有効な場合というのが多々あることを、私の臨床経験として今まで体

験してきたわけでございます。

さて、私たちの研究グループが昨年、国内の口腔領域を専門とする医学部附属病院、あるいは歯学部附属病院の 47 の施設におきまして漢方の使用状況について調査したものです。

最も使われている疾患は、口腔乾燥症、舌痛症、顎関節症、そして不定愁訴、口内炎、歯痛、三叉神経痛、口腔癌、その他の慢性痛、抜歯後疼痛、神経麻痺、歯周病の順番でありました。

その他としましては、口腔神経症、口腔心身症、パニック障害、味覚異常、知覚異常、舌炎、口唇炎、口内炎 根尖性歯周炎、口腔扁平苔癬、歯性上顎洞炎、術後全身状態改善、免疫力回復、化学療法時食欲不振という症状あるいは疾患に対しても漢方が処方されておりました。

では次に、実際、口腔疾患に使用されている主な漢方薬を紹介していきます。よく用いられているものは白虎加人参湯、加味逍遙散、麦門冬湯、柴朴湯、十全大補湯などがあります。

次に、口内炎に処方されている漢方薬を挙げてみました。最も使われているのは半夏瀉心湯、黄連解毒湯、茵蔯蒿湯、黄連湯、白虎加人参湯が挙げられています。

次に口腔乾燥症に処方されている漢方薬を見てみますと、一番に使われているものは白虎加人参湯、次は麦門冬湯、五苓散、十全大補湯、加味逍遙散、このようなものが口腔乾燥症に処方されております。

次に、近年は先ほどの口腔乾燥症も同じでありますが、この舌痛症もよくこういった症状をした患者さんが来院されるようになりました。舌痛症に処方されている漢方薬としては、加味逍遙散、柴朴湯、半夏厚朴湯、立効散、麦門冬湯などが挙げられます。

次に歯周病、こちらも国民病とも言われております歯ぐきが腫れる歯槽膿漏、いわゆる歯周病でございます。歯周病に処方されている漢方薬というのは、排膿散及湯、黄連解毒湯、補中益気湯、桂枝茯苓丸、八味地黄丸、このような漢方薬が主に歯周病に処方されております。

そして、顎関節症に処方されている漢方薬、これは口を開けたりしたときに顎の調子が悪かったり、あるいは音がしたりする、こういった症状です。顎関節症に処方されている漢方薬は、葛根湯、加味逍遙散、芍薬甘草湯、桂枝加朮附湯、こういったものが主に顎関節症に処方されております。

では、最後に、口腔不定愁訴。いわゆる原因がよくわからず、器質的な変化が見られないにもかかわらず、さまざまなお口の症状を訴えるものを広義に口腔不定愁訴としました。口腔不定愁訴に処方されている漢方薬は、加味逍遙散、柴朴湯、半夏厚朴湯、補中益気湯、当帰芍薬散、こういったものが主に口腔不定愁訴に処方されていることがわかりました。

では、まとめとしまして、これまでのお話から、現在多くの医療機関が口腔疾患に対して漢方薬を処方しております。疾患では、口腔乾燥症、舌痛症、顎関節症、不定愁訴、口内炎、慢性疼痛、口腔癌、歯周病などが多く、そのほか口腔心身症、扁平苔癬、術後の全身症状の改善も漢方治療の対象となっていました。これらの疾患は、いずれも確固たる治療法が確立されておらず、また患者さんの体質や精神、他の全身疾患の影響を受け、西洋医学による局所的治療だけでは改善されないケースが多くありました。このような疾患に対しては漢方薬を投薬するケースが数多く報告されております。

今回このように症状別にお話ししましたけれども、基本的には漢方治療では随証治療が原則であります。西洋医学的診断では病因が明確にされずに対応が困難な疾患に対しても、患者さんの現時点での体質や症状から気血水、陰陽、虚実、寒熱、表裏、五臓、六病位などの東洋医学的な概念を用いて診断された証に基づき治療方針が決定されます。よって、西洋医学的には異なる疾患であっても、漢方診断では同じ証と判断されれば同じような漢方薬が処方され、西洋医学的には同じ病名であっても体質などが異なれば、異なる漢方薬が投与されることもあるわけであります。

今回の私たちの研究グループの調査からも、舌痛症、口腔乾燥症、口内炎、顎関節症など、約 20 から 30 種類くらいの数多くの漢方薬が処方されていることがわかりました。この漢方薬の処方の背景には必ず証というものを考えながら、処方していく必要があります。

次回からは、おのおのの口腔疾患に対する漢方薬の処方についてお話しさせていただきたいと思います。以上です。きょうはありがとうございました。